慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	初期マルクスにおける欲求概念(下) : 個人的欲求と社会的欲求の弁証法
Sub Title	La conception des besoins chez le jeune Marx (2) : la dialectique entre les besoins individuels et les besoins sociaux
Author	的場, 昭弘
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1980
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.73, No.6 (1980. 12) ,p.944(72)- 959(87)
JaLC DOI	10.14991/001.19801201-0072
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19801201-0072

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

初期マルクスにおける欲求概念（下）

——個人的欲求と社会的欲求の弁証法——

的場　昭弘

目　次

序
(1)　欲求理論の批判検討
(a)　窮乏化論的把握
(b)　人格形成としての欲求把握
(c)　過少消費的欲求批判
(d)　欲求の対象の把握
(2)　初期マルクスの欲求理論の展開
(a)　欲求と疎外
(b)　欲求と貨幣　（以上前号）
(c)　欲求と分業
(i)　諸個人の欲求
(ii)　私的所有下での欲求
(iii)　欲求と分業
(d)　個人的欲求と社会的欲求
(i)　社会的欲求＝個人的欲求
(ii)　個人的欲求＝社会的欲求
(iii)　個人的欲求と社会的欲求との弁証法
結　び

（c）欲求と分業

(i)　諸個人の欲求

分業（Teilung der Arbeit）という概念を導入するには，プロレタリアートとブルジョアジーとの相互対立といった社会把握（深層）ではなく，諸個人相互の依存，対立関係という社会把握（表層）が必要になってくる。W—G—Wによる流通把握，すなわち単純流通は，そうした把握にいたる重要な概念であることを前章で見てきた。すなわちW—G—Wの循環の中には，人間諸個人の欲求関係が表現され，社会階級とは別に人間諸個人がつくりあげたポジティヴな世界（たとえば生産力の増大によって代表されるような人間関係の拡大）とネガティヴな世界（疎外）とが表現されている。そこでは，疎外されながらも類的社会を形成していく社会が，疎外揚棄への前提として把握されている。W—G—Wへの発展は，人間諸個人の形成を必要とするわけであり，その限りでこうした疎外は一

面ポジティヴに把握されていたと思われる。「発達した産業によって，すなわち私的所有の媒介によってはじめて，人間的情念の存在論的本質がその総体性ならびにその人間性において生成する。」(1)

さて，第3手稿での分析は，分業の歴史的発展にふれず，分業と欲求と生産との相互関係をあきらかにしている。W—G—Wに規定された諸個人の社会としての社会把握は，分業をつうじてえられる生産社会としての市民社会把握とむすびつくことになった。(2) それは市民社会の生産力と生産諸関係へのポジティヴな把握である。こうして共産主義把握が，これまでのように類的共同体をプロレタリアートの集団的欲求によって完成しようという視点から離れ，諸個人の人格的発展を通じて，プロレタリアートに期待するという把握へ移行したということは，それを如実に示しているように思われる。

粗野な共産主義 (rohen und gedankenlosen Kmmunismus) は，集団的欲求の粗野な形での実現としてとらえられる。それは「私的所有の関係の普遍化と完成」としての共同社会である。(3) ここではすべてがはじめから社会的であり，個人の欲求の世界は存在していない。だからこうした集団の欲求は，人間社会の発生，すなわち諸個人の人格的形成を無視して自己の欲求を普遍的に貫ぬこうとする。したがってそこでは，集団的私的所有が実現されるだけで，豊かな人間社会の発生はほど遠いものになっている。「より豊かな私的所有にたいして，すくなくとも嫉妬と水平化欲として反対しており，したがってこれら〔嫉妬と水平化欲〕は競争の本質をさえなくしている。(4)」こうした社会にむかっての共産主義は，過去の共同体（そこには人間が盲目的に自然に縛りつけられ，諸個人の欲求はなかった）へもどることを意味する。だからマルクスは「教養と文明世界全体の抽象的否定，すなわち，貧しくかつ欲求のない人間の不自然な単純さへの帰還……(5)」と述べ，個人的欲求の否定，人間的人格形成の否定をみてとるのである。

そこでは，私的所有のポジティヴな意味がとりあげられ，それは（分業という概念は不明確であるが）分業による人間社会の自然的束縛からの離脱として理解されている。「どれほどまで人間の欲求が人間的欲求となっており，したがってどれほどまで人間にとって他の人間が人間としての欲求（不可欠の必要）となっているか，どれほどまで人間がその最も個人的な現存在において同時に共同体的存在となっているか(6)」ということ，すなわち，個人の欲求が，類を必要とする段階までにい

注(1) K. Marx. Ökonomisch-philosophische Manuskripte aus dem Jahre 1844, Werke, Erganzungsband Dietz Verlag（以下 MEW と略す）S. 563 藤野渉訳「経済学・哲学手稿」大月，1963. p. 194。

(2) 「もともと『分業』とはdivision of labour, Teilung der Arbeit, Die Arbeitsteilung, la division du travail であって，『労働の分割』を意味し，訳語は原語の本来の意味ないし精神を伝えていない。分業の概念は，元来一体をなした人間の『共同労働』のイメージを前提にし，その上で『分割』を意味している。」野地洋行氏の指摘の意味は大きい。野地洋行「マルクスにおける労働概念の展開」三田学会雑誌11号6巻1974 p. 8.

(3) K. Marx, a. a. O. S. 534, 前掲訳書 p. 142.

(4) Id., S. 534 同上 p. 143.

(5) Id., S. 535 同上 p. 143.

(6) Id., S. 535 同上 p. 145.

たることが，問題となってくる。

人間が共同体へ向うという欲求が，単に特殊な集団的欲求としておこるのではなく，一般的な社会の欲求としておこるには，人間個人が少なくとも欲求の源として独立した人格をもっていることが必要である。なぜならこうした高次の社会の欲求は，個人的欲求の発展の上になりたつものだからである。たとえ，そうした発展がW—G—Wによる価値に規定された発達であろうとも，そこには人間諸個人の発達が前提されているのである。粗野な共産主義という意味は，個々の欲求が形成される前に社会の欲求を引き出すということにおいて粗野であるということである。

第2に，マルクスは政治的性質の共産主義（Der Kommunismus nach politischer Natur），そしていまだに私的所有すなわち人間の疎外に冒されたあり方をともなう共産主義を考える。[7] この共産主義では，個人的欲求の発達の中に類の姿が読み込まれている。「しかし，それは私的所有の積極的本質をまだ把握しなかったし，同様にまた欲求の人間的本性を理解しなかったので，この共産主義もまたなお私的所有にとらわれており，感染されている。[8]」この共産主義も，欲求の人間的本質，すなわち人間の個人的欲求にある多面的性格とその社会の欲求とのむすびつきを理解しないで，個人の欲求の量的性格を問題にしているだけである。

マルクスは，第1と第2の共産主義の形態から第3の形態を引きだす。この共産主義は，生産力と分業との基礎の上に立つ諸個人の完成の次にくる高次の類的社会である。人間の自己疎外としての私的所有の積極的な止揚としての共産主義（Der Kommunismus als positive Aufhebung des Privateigentums als menschlicher Selbstentfremdung）。「それゆえに，完全な，意識となった，そしてこれまでの発展の富全体の内部で生成したところの，人間の一個の社会的な，すなわち人間的な人間としての人間の，自己にとっての帰還としての共産主義。この共産主義は完成された自然主義として＝ヒューマニズムであり，完成されたヒューマニズムとして＝自然主義である。それは人間と自然とのあいだの，また人間と人間とのあいだの抗争の真実の解決であり，現存在と本質との，対象化と自己確認との，自由と必然との，個と類とのあいだの争いの真の解決である。それは解決されたる歴史の謎であり，自分をこの解決として知っている。[9]」この共産主義把握こそ第3手稿で得たマルクスの到達点である。この共産主義は，人間の個人の確立，人間個人と社会との確立をふまえた個と類，人間と自然との対立の揚棄であるということになる。

「私的所有の積極的止揚は，人間的生活を我がものとする獲得として，いっさいの疎外の積極的止揚であり，したがって人間が宗教，家族，国家，等々から彼の人間的なすなわち社会的なあり方へ帰ることである。[10]」いっさいの疎外からの止揚ということは，社会階級としての疎外からの止揚で

注(7) Id., S. 536 同上 p. 145.
(8) Id., S. 536 同上 p. 145.
(9) Id., S. 536 同上 pp. 145-146.
(10) Id., S. 537 同上 p. 147.

はなく，諸個人の個人的欲求の疎外からの止揚であると思われる。そして宗教，国家，家族は，そうした諸個人を形成した分業の疎外的あり方であり，社会的あり方ではない。国家や家族の分業としての社会的あり方とは，諸個人の欲求を規制しあうあり方以外にありえない。しかもこの共産主義は，自然と人間，人間と人間との同一性の社会である。「自然の人間的本質は社会的人間にとってはじめて存在している。なぜなら，ここにはじめて自然は人間にとって，人間との絆として，他の人間にとってのおのれの現存在およびおのれにとっての他の人間の現存在として，同様にまた人間的現実の生活のエレメントとして，現存しているからである。」「こうして社会は人間と自然との完璧な本質一体性である。」(Vollendete Wesenseinheit des Menschen mit der Natur)(11)

ここでマルクスが主張するのは，自然を媒介にした個人的欲求と社会的欲求との統一である。社会的欲求は，個人を規制する一面的な欲求ではなく，それを含む多面的欲求となる。「個人は社会的存在なのである。」(12)「人間の個人的生活と類的生活とは別なものではないのである。」(13)と述べているように人間の個人的欲求は，社会の欲求の表現であり，人間の個人的欲求の現象が社会的欲求であり，その両方は結びついている。マルクスは，欲求と使用価値とをむすびつけ，人間の個人的欲求も社会的欲求もともに使用価値とむすびついていることによって，両者は同一化すると考えている。

しかしこうした共産主義把握は，人間の社会的意識や個人的意識，さらには生産諸力の展開がなければ，一種のユートピアであるように思われる。これまでに明確となっているところは，私的所有の社会が，たとえ疎外された形であれ，歴史上で初めて個人の人格をつくりあげたということだけである。「全歴史は，人間が感性的意識の対象となるため，そして『人間としての人間』の欲求が〔自然，感性的な〕欲求となるための，準備および発展の歴史である。」(14)私的所有の社会でのW—G—Wといった形での諸個人の欲求の形成は，人間の諸欲求の完成のための準備の歴史としてとらえられている。現実にはもちろん欲求の全面開花としての共産主義を示すのは容易ではない。後期マルクスの視点からみれば，こうした目標のもとで，(15)私有財産の社会の把握がポジティヴにとらえられたことだけでも大きな成果と言えよう。

(ii)私的所有下での欲求

マルクスの措定した共産主義社会にいたる過程は，生産と分業を基礎にした歴史的発展の中で形成されていく。私的所有の社会では「各人は他人の1つの新しい欲求を創出しようと思惑をやる。

注(11) Id., SS. 537-538 同上 p. 148.
(12) Id., S. 538 同上 p. 149.
(13) Id., S. 539 同上 p. 150.
(14) Id., S. 543-4 同上 pp. 157-8.
(15) 「豊かな人間と豊かな人間的欲求とがあらわれる。豊かな人間は同時に，人間的な生活表明の全体性を必要としている『欠いている』人間である。彼自身を実現することが内的必然性として，必要〔欠乏〕として，彼のなかに存在しているところの人間である。」Id. S. 544 同上 pp. 55-9.

それは他人を強制して新しい犠牲にしようとするためであり，他人を新しい依存の中に移して，新しい享楽のしかたへ，したがってまた新しい経験的破滅のしかたへ誘惑しようというわけである。[16]」人間は他人のG（貨幣）の目的となり，Gへの欲求が人間の唯一の欲求となる。人間と貨幣との関係は，bedürfen の本来の意味をよく表現している。たとえば，人間が貨幣を欲すれば欲するほど（bedürfen）人間的欲求が欠乏していき，逆に人間的欲求が増大すればするほど貨幣への欲求は欠乏化していく。欲求が起これば それが充足（befriedigen）されるというのが，人間的欲求の常であるが，ところがG—W—Gの社会では人間的欲求は欠乏（bedürfen）していく一方である。この社会での充足は，質的欲求が欠乏するかわりに得られる量的な充足だけである。「したがって貨幣にたいする欲求は国民経済によって生産された真の欲求であり，国民経済が生産する唯一の欲求である。一貨幣の量がますます貨幣の有力な属性となる。[17]」

G—W—Gの運動は，人間の欲求が妄想的人間の欲望（gebildete Gelüste）となっていく過程である。欲望とは，物的なものに対するとりこであり，欲求の一面化である。それは情念のとりこであり，豊かな欲求というものを拒否する。G—W—Gの欲望は貨幣であり，労働者にとっての人間的欲求などは無視される。そればかりか「人間がなんら人間的な諸々の欲求をもっていないばかりでなく，動物的な欲求ですらやむ。[18]」という点にまで達する。

こうした妄想的な人間の欲望である貨幣は，資本家と労働者との間の関係に如実にあらわれる。「(1)彼は（資本家は——筆者）労働者の欲求をぎりぎり必要な最も悲惨な肉体的生存維持〔の欲求〕へ還元し，労働者の活動を最も抽象的な機械的運動へ還元する。[19]」資本家にとって労働者の欲求とは，生活手段への欲求（量的）であると考えられる。労働者階級は，人間的欲求をもたない，非個性的な階級として考えられる。しかし，労働者は個人的には個人的欲求を持っているし，労働者一般も社会的な質的欲求をもっている。ところが，資本家にとっては，労働者の社会的な欲求の量的性格を生活手段に固定させることが問題なのである。こうして資本は，労働者の人間的欲求ばかりでなく，量的な欲求をも減らそうとする。それは禁欲（Askese）である。禁欲は妄想的な願望の犠牲となるべく労働者に課せられる。

ここでの労働は，個人的具体的欲求，社会的な具体的欲求を奪われている（資本家もそうであるが）ばかりでなく，社会的欲求の抽象的形態である量的な欲求をも奪われている。資本にとっては，この社会的欲求の抽象的形態が個人的欲求であるから，労働者のこうした形態での量的欲求は削られるべき運命にある。資本家の個人的欲求は，はじめから抽象的欲求であり，妄想的欲望（Gelüste）

注(16) Id., SS. 546-7 同上 p. 164.
(17) Id., SS. 547 同上 pp. 164-165.
(18) Id., S. 548 同上 p. 167.
(19) Id., SS. 548-9 同上 p. 168.

であり，労働者に対しては彼の Gelüste を削って禁欲を強要してくる。もはや労働者は，社会的欲求の量的形態をも奪われるのである。

こうした労働者の側の欲求の把握は，集団的欲求の不充足を意味するだけでなく，彼の人間としての個人的欲求の不充足をも意味する。だから，労働者はもっとも疎外された階級として把握されているわけである。個人的欲求や社会的欲求は，資本家にも労働者にもあるわけであるが，資本家にとっては，個人的欲求の多面的側面が欠落し，直接に社会的欲求の抽象物（量的欲求）となっている。労働者には，逆にそうした資本の欲求のために，具体的有用的な個人的欲求，社会的欲求が否定され，さらには抽象的欲求（貨幣）まで否定されるのである。

しかし，一方で私的所有の社会をみると，W—G—Wの量的社会としてそれは展開される。そこでは資本と賃労働との貨幣の奪い合いは存在するとしても，資本家や労働者の個人的欲求はGにたいするものであり，その欲求主体の相互関係として社会があるという，いわゆる市民社会論が成り立つ。「社会は（—略—）市民社会であって，そこでは各個人は諸々の欲求の全体であり，各個人は他人にとって，また他人も各個人にとってただ両者が相互に手段となりあうかぎりでのみ現存している。」[20]市民社会とは，W—G—Wとしての量への欲求をもったものとして措定される社会のことである。個人のエゴイズムも資本家も賃労働者もその中では同じ個人として把握される。

(iii)欲求と分業

同じ諸個人として把握されるW—G—W（単純流通）の社会は，分業の社会としても把握される。分業はしたがって「1つの実在的な類的活動としての人間的活動の，あるいは類的存在としての人間の活動としての人間的活動の，疎外された，外化された定立よりほかのなにものでもない。」[21]ものと考えられる。分業という把握自体が個人と個人との関係であり，しかもエゴイズムの関係として措定される。アダム＝スミスを引き合いに出してマルクスは語っている。「われわれの他の人間たちにおいて，彼らの人間性にではなくて，彼らのエゴイズムに話しかける。われわれは彼らに，われわれの欲求のことはいちども話さないで，いつも彼らの利益のことを話す。」[22]

分業は欲求のエゴイズムの発展からくるものであり，人間の多面的欲求が原因ではないという考えがマルクスに貫かれている。しかし分業は人間のエゴイズムの結果として葬りさられるべきものだ，とマルクスが考えているとは思われない。逆にエゴイズムを通じた分業の中に個人的欲求の確立と社会の欲求の確立をみているように思われる。

『ドイツイデオロギー』では，生産諸力と交通諸関係といった把握で分業の展開が行われる。ここ

注(20) Id., S. 557 同上 p. 183.
(21) Id., S. 557 同上 p. 183.
(22) Id., S. 558 同上 p. 184.

での交通（Verkehr）は諸個人相互の関係であるが，単純な意味ではいわゆる運輸であり，さらには分業そのものや感性的な社会意識の交通や言語[23]までも意味している。これらを包括して交通概念を規定すると，それは人間諸個人の現実的な関係を意味している。もちろん諸個人は，かれらの生産の物質的諸条件に依存しているので，交通自体が独立に存在するということはない[24]。しかし交通は生産諸力を発展させる人間の意欲の創出といった形での生産発展の動機でもある。そうして「これまでのすべての歴史的諸段階に当然存在した生産諸力によって規定され，逆にそれを規定しかえす交通形態とは，市民社会のことである[25]。」と述べているように，交通の意欲としての意義をマルクスは，はっきりと把握している。

交通が『ドイツイデオロギー』で大きな位置を占めていることの意味は，交通が物的生産力と人間とをむすびつける要であるからである。交通は人間を物的生産力と結びつけることによって，人間諸個人に現実性を付与していく。人間諸個人は決して歴史や生産力の捨象物ではなく，物的生産力を前提にして展開される社会関係の中にある諸個人であることが明確となる。フォイエルバッハに関してマルクスが批判していることはまさにこれを示している。彼の個人という概念は，「けっして現実に存在している，行動している人間にまで到達せず，かえって≪人間というもの≫という抽象物にいつまでまとどまっていて，やっと感覚においてだけ≪現実的・個人的，肉体をそなえた人間≫を認めるところまできているにすぎない[26]。」というわけである。フォイエルバッハ批判からでてくる根本的視点は，人間が交通の中で個人的抽象物ではなく，現実的な生身の人間として登場するということにある。

現実的人間は，生産諸力を基礎にした物的欲求，肉体的欲求，精神的欲求を求め，それをつうじてお互いの人間関係を形成していく。物的欲求という視点から人間社会を規定していくものは分業である。しかし分業が物的な欲求という視点からだけでなく，精神的・肉体的欲求という視点からも，人間社会を規定していくのだということも見過してはいけないであろう。いずれにせよ分業を通じて，現実的人間は諸欲求を発展させてゆく。つまり，「あらゆる時代に現存する生産力の結合が生じたときは，そうすることが諸欲求によって必要とされたからであった[27]。」マルクスにとって生産力と欲求とは人間の生産力の展開と同様に本源的なものとなっている。本源的なものであるということは，欲求が生産力と密接にむすびついていることを意味している。生産力は人間にとって他人と物的に関係するメディアであり，それ以外に人間は物的に関係する方法をもっていない。さらに，発達した意識をつくりあげる巨大な人口を支えるものも生産力である以上，生産力は人間諸

注(23)　「そして言語は，意識と同様，まず他の人間たちとの交通の欲求，渇望からうまれたものである。」K. Marx/. F. Ergels, Deusche Ideologie, MEW, Band 3. S. 30 花崎泉平訳「ドイツ・イデオロギー」合同新書 p. 59.

(24)　Id., S. 21　同上　p. 31.

(25)　Id., S. 36　同上　p. 73.

(26)　Id., S. 44　同上　p. 52.

(27)　Id., S. 61　同上　p. 129.

個人の精神的な交通の中にもはいってきている。すなわち生産力上昇への欲求とその結果は，人間にとってその時代意識そのものとなっている。[28] だから生産を離れた欲求や，欲求を離れた生産といった概念は，抽象的な無内容なものとならざるをえない。

マルクスは，本源的な欲求を次のように意味づけていく。人間にとって生きることが第一の欲求であるから「生きるために必要なものは，なによりもまず食べること飲むこと，住居，衣料とこの他若干のことである。それゆえ，第1の歴史的行為とは，これらの欲求をみたすための諸手段の産出，物質的生活そのものの生産である。[29]」これは人間にとって必要な自然な欲求である（naturlichen Bedürfnisse）。自然的な限界に影響されることの多い段階では，人間は基本的欲求としての衣食住を最低限確保しようとする。そのあらわれが，自然への働きかけ，さらには生産手段への欲求である。それが人間の組織と人間の意識とを自然から遊離させることになる。自然からの遊離は人間の意識的な諸個人としての人間形成へすすむ過程であり，そこから動物的欲求と区別される人間の欲求が形成される。

「第2に大事なことはこの最初の欲求がみたされること自体が，欲求をみたす行為とすでに手に入れている欲求をみたすための道具とが，新しい諸欲求へみちびくということである。[30]」こうした欲求として，人間の社会の中にある意識は措定される。社会的な意味での欲求としての人間相互の意識が，胃の腑の欲求に続いてでてくる。それは一方で肉体的欲求をより制限し，分業をより進めていく。もはや人間が行う労働は，自然に対して無意識的にたちむかうという労働から，意識的な労働へと変わっていく。それは精神的な意識としての新しい欲求である。

第3に「人間たちが（一略一）他の人間たちをつくりはじめる。」こうした新しい欲求は，人間の生殖的創造，維持を展開し，人口の増大をもたらす。人口の増大は人間社会の成立の前提であり，社会意識の形成の契機となる。人口の増大は，人間と自然との交わりへの動物意識を人間から取り除き，人間同志の交渉への意識を人間自身に自覚させていく。それは動物と同じく群棲意識であるが，ただ区別されうるのは，その場合の意識は本能ではなく，人間特有の意識であるということである。

しかし，こうした人口増大は人間の間にひとつの社会的依存関係をもたらす。そうした依存関係が，自然成長的な分業，社会的な分業へと発展していくにつれて，諸個人の社会的な関係としての市民社会の姿が浮彫りになってくる。

さて市民社会では，諸個人の意識は諸個人の利害と普遍的利害との対立関係の中であらわれ，諸個人の欲求と社会の欲求との対立としてもとらえることができる。それはまさに市民社会の中の人

注(28)「そもそも始まりから，人間同志のあいだには，諸欲求と生産様式によって規定された，人間たち自身とおなじ古さをもつ唯物論的つながりがみられるのである。」Id., S. 30. 同上 p. 59.

(29) Id., S. 28 同上 pp. 54-56.

(30) Id., S. 28 同上 p. 56.

格的個人の関係である。しかし，表層的に人格的個人を形成するものこそ，実は深層的には階級的個人を形成するブルジョア社会の姿であり，市民社会はこの二つの関係を二重に秘めていることがわかる。「人格的個人と階級的個人との区別，個人にとっての生活諸条件の偶然性は，それ自体ブルジョアジーの産物である階級の登場をまってはじめてあらわれてくる。」[31] そこで，分業の発展は，一面で人格的個人としての個人の完成を生み出すが，他面でエゴイズムとしての個人の欲求を発展させ，社会の欲求を資本のエゴイズムとしての欲求に変えていくという可能性を秘めていることが明らかになる。次の章でこうした関係についてより詳しく述べることにしよう。

さて，この章の概略をまとめるならば，マルクスは分業と欲求との把握を次のように行っていることがわかる。W—G—Wの形成による諸個人の形成は，市民社会のもつ積極性を自然からの解放として，把握することを可能にする。自然から解放された社会は，私的所有社会における個人の欲求の形成としてあらわれるが，諸個人の多面的な欲求は質的に制限されるばかりか，ある階級にあっては量的にも制限される。しかしここからすぐに資本による欲求支配の体制を批判することはできない。すなわち，こうした発展の基礎には，分業による生産力と欲求との関係の歴史があるわけであって，歴史理解をぬきにしてこうした体制の変革を主張することはできないからである。こうした社会で分業のもたらす矛盾は，個人の欲求と社会の欲求とのバランスが，生産力との調和をこえるところに求められるべきであり，そこではじめて分業による欲求の意味が明らかとなるのである。

(d) 個人的欲求と社会的欲求

これまでマルクスの欲求概念を疎外，貨幣（前号参照），分業といったカテゴリーとの関係の中でみてきた。それによって欲求という概念が，人間が人格的発展を行うための重要な契機であることが判明した。今度はそれを市民社会における二重の個人（人格的個人と階級的個人）を形成する社会的欲求と個人的欲求との弁証法という枠の中で見ることにする。

(i)社会的欲求＝個人的欲求

「諸個人は，ただかれらの特殊利害，かれらにとって，かれらの共同の利害とは一致しない利害のみを追求するからこそ，まだおよそ普遍的なものというのは，共同性の幻想的な形態であるからこそ，その普遍的なものは，かれらにとって≪疎遠な≫かれらから≪独立≫なもの，それ自体ふたたび特殊的な，独自な≪普遍≫—利害とみなされるのである。」[32] 諸個人の欲求は，特殊利害である

注(31) Id., S. 28 同上 p. 56.
(32) Id., S. 76 同上 p. 139.
(33) K. Marx. a. a. O., 34. 前掲訳書 pp. 66-67.

から共同的形態から疎外されるというだけではない。共同的形態が彼らにとって幻想的にみえるからこそ共同的形態から疎外される。ここではエゴイズムとしての個人的欲求も，個人の社会的立場としての社会的欲求も，ともに特殊的であることが確認されている。

マルクスにとって，私的所有の社会では社会的欲求や個人的欲求も特殊的欲求である。なるほどプロレタリアートの欲求もそれ自身としてはこのカテゴリーには入るのであるが，しかし，マルクスはプロレタリアートを，かれらの欲求が唯一の普遍的欲求を体現しなければならないような階級と考える。「その階級がそうなしえるのは，その階級の利害が，従来の諸関係の圧力のために，特殊な階級の特殊な利害として自己の利害を展開できなかったからというよりは，むしろ台頭するさいには，その階級の利害が，すべての他の非支配階級に共通の利害と結びついているからにほかならない。」[34] プロレタリアートが普遍的欲求を体現するのは，その他の被支配階級の欲求を体現できるかぎり，また，制限されている諸個人の多面的欲求を解放するかぎりにおいてである。すなわちプロレタリアートの普遍的欲求は，あの幻想的と思える，諸個人のエゴイズムに対置される普遍的利害を意識しているだけでなく，諸個人のエゴイズムによって否定された諸個人の人格的な多面的欲求をとりわけ意識しているのである。いいかえれば，この階級は人格的個人と階級的個人との二重性を意識している唯一の階級であり，階級的個人による普遍的利害の克服だけでなく，そうした階級的個人をも人格的個人へ移しかえそうとする欲求をもつ唯一の階級である。

したがって，こうしてマルクスの社会的欲求，個人的欲求は，ともに現存の社会でのあり方を延長することによっては共産主義へと進むことはできないものとなる。なぜなら，プロレタリアートが階級的個人の利害を普遍的なものにかえても，諸個人の人格的個人としての発展は依然として否定されているからである。プロレタリアートの欲求も，それが私的所有社会への水平化欲求として出現するときには（賃銀闘争），それは特殊利害を表現するにすぎない。特殊利害としての普遍的欲求が真の普遍的欲求となるには人格的個人の欲求を積極的につくりあげる以外にはない。

こうした特殊利害と普遍利害とが混同されたのは，普遍的利害が量的なものと考えられたからであり，人格的個人としての質的側面が忘れさられていたからである。市民社会は人格的な側面と階級的な側面とを二重に発展させていくのである。こうした社会の階級的諸矛盾は，この二重の上におこるのである。この二重性を批判しないで，階級的利害だけを批判することは，社会の矛盾を批判したことにはならない。だからそうして与えられたプロレタリアートによる普遍的利害の達成も特殊的な利害の達成にすぎないのである。

(ii)個人的欲求＝社会的欲求

注(34) Id., S. 48. 同上 p. 99.

マルクスはプロレタリアートの集団的欲求も，それが私的所有の社会における物的利害の調和だけを意味する場合には，それを特殊利害の欲求と呼んだ。それは諸個人の欲求を強引にプロレタリアートの集団的欲求に従属させることも意味していた。しかし，人格的個人の発達を無視して他面で個人的欲求のみを評価することも大きな誤謬になる，マルクスはそれをシュティルナー批判を通して明らかにする。

「シュティルナーはさまざまの人生段階をただ個人の『いろいろな自己発見』としてのみとらえ，しかもこれらの『自己発見』はいつでもある特定の意識のあり方へ還元される。」[35] シュティルナーの場合，個人という抽象概念が諸個人に先行する。したがって，欲求といった概念も諸個人ではなく，個人というカテゴリーから出発する。「諸個人とともに進行して意識の変化を生みだす身体的および社会的変化は当然彼になんのかかわるところでもない。」[36] フォイエルバッハが[37]人類としての欲求を措定し，かつそれを個別者の欲求に対立させたのと反対に，シュティルナーは個人を唯一者として人間類として全体の欲求に対峙させる。彼は，個人と諸個人との関係を全く無視してしまった。つまり，現実生活の中でくらす人間の諸個人を無視してしまっているのである。こうした個人こそ特殊な個人的欲求を形成する基盤をなすものである。[38]

もちろん，特殊な個人の欲求は禁欲といった一面での欲求の否定と他面での禁欲という欲求の肯定を含んでいる。「献身的なエゴイスト（公民）は，普通の意味でエゴイスト（ブルジョア）を支配する。」[39] 聖なる個人は，私的所有の社会の不安をとりのぞくための，自己節制欲をもつ個人としてあらわれる。それは，他人との関係を前提しない，独立した個人の欲求である。

ところが現実の人間社会は，生産力の発展とともに，人間を諸個人として非節欲的なエゴイズムをもった個人として発展させた。個人は生産諸力の発達とともに，愛や情熱といった精神的な生活の中でなく，物的なエゴイズムをもった社会集団の中へは入っていった。

諸個人の欲求は，愛，情熱といった個人の抽象的な感性ではなく，現実の生産にむすびついた人間社会の相互欲求として考えられるべきであった。生産力から遊離した欲求は，なるほど個人の多面的な欲求であったとしても，生産諸力の発展を無視してはそうした欲求は願望や夢にような欲求

注(35) Id., S. 111. 大内兵衛他監訳「ドイツ・イデオロギー」（マルクス，エンゲルス全集3巻）同上 p. 111.

(36) Id., SS. 111 同上 p. 112.

(37) 「さらに同じところにこういう文句がある。『フォイエルバッハにあっては個人は類に屈従し，類に仕えねばならない。フォイエルバッハの類はヘーゲルの絶対者であって，そんなものはどこにも存在していない。』」Id., S. 85 同上 p. 82.

(38) Id., 112 同上 p. 112. 個人という概念はヘーゲルにあっては諸個人というカテゴリーでとらえられていた。「市民社会においては各人が自分にとって目的であり，その他いさいのものは彼にとって無である。しかし各人は他の人々と関連することなくしてはおのれの諸目的の全範囲を達成することはできない。」G. F. Hegel, Grundlinien der philosophie des Rechts, (herausgegeben von Helmut Reichelt) ein Ullstein Buch 1972. S. 169. 岩崎武雄監訳「法の哲学」中央公論，1978. p. 414. 人間は他の個人と，生産において密接にむすびついた概念である。ところがシュティルナーはむしろシェリングの同一性哲学に影響を受けているようである。

(39) Id., S. 156 同上 p. 165.

とならざるをえない。マルクスの場合，個人の欲求は決して生産力に単純に照応していくものではないが，しかし生産から離れて勝手に存在するものでもない。「人間たちは『〔シュ〕ティルナー』（にあっては），もはや〔外部〕世界によって規定されるということがなく，またもはや（欲）求力学的衝撃〔によって〕生産活動へかりたてられるということもなく……（彼らは）ただ奇跡によってのみ生きながらえたということでしかありえない。」(40)

こうした特殊なる個人の欲求による彼岸の世界を表現するものとして，シュティルナーは愛の国を考える。「『共同体』の原理は，共産主義において頂点に達するがゆえに，共産主義は『愛の栄光』である。」(41) そうして，彼の共同体は，特質的には個人の節制による労賃の平等を実現しようとする。「聖マックスはいまや共産主義全体を一般にみんなが労働者であることとして，平等な労賃を確立した。」(42) ここでは賃金の平等は節欲をもった個人的欲求の表現となっている。すなわち，物質的な欲求における個人の節欲が，労賃の平等への礎石となる。

マルクスは，シュティルナーのように節欲をもった個人を理想とする社会を否定する。むしろ人間は諸個人として物的にも精神的にも分裂していかざるをえず，そうした分裂の中で物的にも精神的にも諸個人が結合する社会が措定されている。そうした射程の中で共産主義が展望されるわけである。「共産主義がこれまですべての運動から区別される点は，それが，これまですべての生産と交換との諸関係の基礎をくつがえし，はじめて自覚的に，すべての自然成長的諸前提を，これまでの人間たちの手になるものとみ，それらの自然成長性をはぎとって，結合した諸個人の力に服せしめるところにある。」(43)

シュティルナーは，個人の精神的な節欲によって共産主義社会の到来を予想する。彼にとって個人の節欲は，社会一般の欲求と一致しているが，それは幻想でしかないことに彼は気付かない。「共同的利益の立場をとる者が『献身的な人』であるのは，私的利益として固定された個人的利益にたいして彼が反対し，共同利益が一般的かつ理想的利益として規定されるためにすぎない。」(44) 共同的利益を守る献身者とは，共同的利益を真に守ろうとする人々というのではなく，個人的利益のエゴイズムにただ反対している人々にすぎない。

シュティルナーの個人とその献心的・聖人的欲求は，禁欲そのものであると言える。そこで何故こうした考えによる共産主義が幻想的であるのかを考えてみる必要がある。マルクスはここで欲望(45)は人間の本性であり，本性である以上，節欲といった非人間的な考えをもつ共産主義は存在しえな

注(40) Id., S. 172 同上 p. 183.
(41) Id., S. 191 同上 p. 205.
(42) Id., S. 197 同上 p. 212.
(43) Id., S. 70 花崎泉平訳 p. 144.
(44) Id., S. 230 大内監訳 p. 250.
(45) ここでマルクスは欲求（Bedürfnis）と欲望（Begierde）という二つの言葉をつかっているが，欲求を基本概念とし

いことを示す。たとえば，シュティルナーの「『キリスト教は，我らを自然規定（自然による規定）から駆りたてるものとしての欲望（Begierde）から救済することをめざしたのであり，したがって人間がその諸欲望によって規定されないことを欲した。』」に対して，マルクスは「キリスト教がわれわれを肉の支配や『駆り立てるものとしての欲望』から解放しようと思ったのは，われわれの肉，われわれの欲望を，なにかわれわれにとって疎遠なものと見なしたからにほかならない。」[46]という。マルクスは，欲望は人間の本性にとって決して疎遠なものではなく，節欲という方法によって否定されるものでないことを意識していると思われるし，他面で欲望を否定した人間は人間ではありえないという強い肯定も含まれているようにみえる。そうである以上，欲望を否定した，あるいは節欲を強制した共産主義は，人間の解放であろうはずはない。

このようにマルクスはシュティルナーを使って，人間の個人としての特殊な欲求から普遍的な社会の欲求としての共産主義を抽出することが，いかに馬鹿げたことであるかを展開している。それは禁欲といった非人間的な共産主義に導くにすぎないことを強調する。ここで彼が批判しているものは，禁欲といった無意味な概念であると同時に，諸個人を個人としてとらえるという発想である。これが，個人的欲求によって社会的欲求を獲得していこうとする立場である。

(iii)個人的欲求と社会的欲求との弁証法

個人的欲求を社会的欲求と同一視しようとする立場（シュティルナー）も社会的欲求を個人的欲求と同一視する立場もマルクスによっては否定された。マルクスは，この両者の関係を，一方を他方に引きつける同一性（identität）によって解決しようとはせず，むしろ二つの欲求が生産諸力の発展をつうじて結びあう可能性を語っているだけである。マルクスにとって重要なのは二つの欲求が合一化することではなく，ともに補完的な関係として存続するということである。

個人の欲求というものは，社会的欲求によって規制されるわけであるが，逆にそれによって個人的欲求は社会性を獲得していく。社会的な欲求は生産諸力が低い間は，諸個人への平均的欲求を強制するまでに達せず，個人に全体への服従を誓わせるだけである。生産諸力の発展は，なるほど個人を疎外する。しかし同時に個人的欲求をより前面に出すことによって，社会的欲求は個人を，承認しなければならなくなる。私的所有のもとでの問題は，まさにここに始まる。その矛盾を解決するには社会的欲求を個人へのおしつけと批判するだけでなく，それをポジティヴに個人の完成であると認めること（フォイエルバッハへの批判），個人的欲求を独立した人間の抽象物ではなく，現実の生産諸力に規定された一面的欲求であるということとして把握すること（シュティルナーへの批判）

て，欲望をその系列概念としてつかっている。「欲望の根底によこたわっているあらゆる欲求（Bedürfnis）もまたなにか『固定的なものであって……』」（Id., S. 238. 同上 p. 261）もっと明確に言えば欲求は欲望や願望や需要といった基本概念であり，その基本概念は生産体系の中でのみ意味をもちうるものである。

注(46) Id., S. 236 同上 p. 259.

が重要である。前者に対して諸個人の欲求の完成を語ることになり，後者に対してはプロレタリアートの変革の欲求を語ることになるが，それぞれ一方だけを強調することはできない。この統一こそマルクスの課題となる。

私的所有の社会では個人の欲求は，社会的な欲求に規制されるわけであるから，共産主義においては，個人的欲求のみが存在するとか，社会的欲求は共産主義において人間社会の理想的姿をとるのであるから，諸個人の欲求はなくなるとかいった解決は，何等の解決も意味しない。人間の個人的欲求が社会的であるということは，他面で社会的でない個人的欲求も残存しているはずであるし，個人の欲求を規制しない社会的欲求も存在するはずである。そうした欲求が共産主義でも残るということが確証されねばならないとすれば，共産主義での欲求は，多面的個人の欲求と社会的福祉文化としての社会の欲求（総個人的欲求）として存在することになろう。こうしたことは，マルクスが共産主義で残る欲望と消滅する欲望とを分析している文章からも明らかとなろう。「共産主義的組織は，今日の諸関係が個人のうちにみたしている諸欲望に，二重の仕方ではたらきかける。これらの欲望の一部，すなわち，あらゆる関係のもとで存在しており，ただ形式と方向についてのみ，いろいろ違った社会的諸関係によって変化させられるにすぎないような欲望は，この社会形態のもとでもまた，正常な発展のための手段が与えられるのだから，ただ変化させられるにすぎない。これに反して他の一部，すなわちただ一定の社会形態，一定の生産条件および交通条件にのみその起源を負うているような欲望は，それの存在条件をまったく奮われることになる。」(47)

プロレタリアートの変革の欲求といったところで，それは生産の諸条件や個人の形成を捨象して生じるものではない。物的な生産や能力の破綻は交通（諸個人の関係）にかかわってくる以上，プロレタリアートの欲求は，人間の諸個人としての個人的欲求の増大と直接にむすびついている。「結局，われわれが展開した歴史観からやはり次のような諸帰結をうる(1)生産力が発展するにつれて，現にある諸関係のもとではた害だけをひきおこし，もはや生産力ではなく破壊力（機械装置と貨幣）でしかない生産力と交通手段が生ずる段階が到来する。」(48) 生産諸力と交通との条件は，生産諸力と消費との矛盾であり，それは個人の欲求の限界でもある。プロレタリアートはそれを待たねばならない。

しかも，私的所有の社会では諸個人の欲求においては，現実的な欲求（支払可能）と可能的欲求（願望）が分裂していて，交通諸関係は不安定であるし，また諸個人の多面的な欲求はそれによって著しく制限されている。「第2に聖サンチョはみずから人的能力と物的能力とを区別しており，したがって彼はそれによって享楽と享楽する力とを区別している。私は享楽するための大きな人的力（能力）を保つが，それだからといって必ずしも物的力（貨幣など）をもっているとはかぎらな

注(47) Id., S. 237 同上 p. 260.
(48) Id., S. 69 花崎訳 p. 78.

い，ということがありうる。したがって私の現実的『享楽』はまだいつも仮定的である。[49]」こうした現実性と可能性との分離によって生産体系のアンバランスと個人の多面的発展が阻害されてしまう。

共産主義では，こうした生産体系のアンバランスは生産諸力と交通体系の変革によって克服される。すなわち，巨大な生産諸力を直接統轄する結合した生産者は，多面的な個人的欲求を満たすことによって，生産体系と調和する。逆に多面的な個人的欲求の発達にとって無駄な生産諸力は節約される。そこでは諸個人の欲求は，決して個人の精神的自由のためだけなく，生産体系の均衡にも役立つために必要とされる。そして社会の欲求は個人を一面的に量へ還元するためにではなく，個人の多面性を完成するための補完をなすことになる。「共産主義社会，すなわち個人と個人の独自な自由な発展がけっして空文句でない唯一の社会の内部では，この発展はまさに諸個人の連関こそ条件としている。[50]」そしてこうした個人的欲求と社会の欲求が真に補完関係となり，それらの対立的関係が揚棄され，人間の能力の差異が量的なものとしてでなく，質的なものとなり，共産主義が成立する。「したがってわれわれの現存の諸関係が基礎をになっているまちがった原則『各人にはその能力に応じて』という原則は，これがせまい意味での享受に関係しているかぎり，『各人には欲求に応じて』という原則に変更されなければならない。[51]」

こうして初期マルクスでは，個人的欲求と社会の欲求との関係が，生産と交通の関係，プロレタリアートの変革への欲求から，共産主義での欲求の内容を規定するにいたる大きな問題となっていることは容易に理解されよう。

結　び

我々はマルクスにおける欲求の概念を，初期のさまざまなカテゴリーを通じて把握することができたと考える。第1に，欲求の意味は，生産を媒介にした人間関係であり，それは身体という不可分なものをもった主体的個体としての諸個人のもつ個人的欲求と，社会を媒介にした社会の欲求とにわかれた。第2に私的所有の社会では，それが個人的な主体的欲求に対しての社会的欲求による量的，質的規制としてあらわれ，二つの欲求は生産と交通と個人の多面的欲求の主体的な発展に対する阻害を生みだした。第3に，共産主義においては，そうした対立が消滅し，個人的欲求と社会的欲求は，相互補完関係として，個人の欲求の多面性を獲得するための手段となり，かつ生産体系と交通とのバランスを確保する手段となった。しかし，こうした補完関係は，決して判然と2つに区分されるという性格のものではなく，個人の欲求がいかに主体的に展開するかどうかにかかって

注(49)　Id., S. 306　大内訳　p. 340.
(50)　Id., S. 424　同上　p. 475.
(51)　Id., S. 528　同上　p. 586.

いるような関係である。だから，マルクスとしても無条件に２つを区別しているのではなく，個人の多面的な発展がつくり出す真の主体的欲求が，この両者に補完的な区別をつくり出すと考えているように思われる。だから，我々の注意すべきことは，こうした補完関係の成立ではなく，補完関係を補完関係たらしめる人間個人の主体的欲求の完成とそれを実現たらしめる個人の主体的努力である。これを，我々は個人的欲求と社会的欲求との弁証法といっているのである。

こうしたマルクスの欲求分析は，他面で多くの示唆を与えることができると思われる。プロレタリアートの階級闘争の意味づけの問題，資本主義社会での個人の形成の問題，社会主義での個人的欲求とプロレタリアート独裁の問題について何等かの別の説明を提供してくれるかもしれない。しかし，初期マルクスの欲求論の問題からそこへ進むには，まずマルクスの欲求論とかれの歴史理論との関連を解明しなければならないので，小稿の範囲を大きくこえてしまうことになろう。こうした問題については他日を期したい。

（慶應義塾大学大学院経済学研究科博士課程）